視
OPINION
点

CO-EXIST-SEA: 科学技術情報のパートナーシップ

ノーマ, ムスタファ
NORMAH, Mustaffa

本題に入る前にまず、アジアの12か国と東アフリカを襲った津波被害をまず取り上げざるを得ない。この津波は世界を震撼（かん）させ、その被害たるや筆舌しがたい。今回の津波はこれまでにないまったくもって悲惨な、恐ろしいものであった。マグニチュード9の地震がもたらした津波の死者は22万人を超え、数百万の方々が一瞬にして、ホームレスになってしまった。

国際社会および地元社会はすぐさま津波被害に対応し、それは高く賞賛されている。数日のうちにボランティアが活動を開始し、医療援助、生存者の救出、近親者を失った方々の慰労などに広く動いている。過去に前例がないくらい、多くの国々からの義援金が集まり、被害者や被害地域の救済に向けられている。ここマレーシアでは、今回のような津波がわが国を襲うなど、想像だにできなかった。今回の津波の犠牲者は、マレー半島の北岸地域に住む、漁民、行楽客、子ども、婦人、年長者の人々であった。漁民の被災者は漁船や、漁具など、生計手段を失ってしまった。実際にこの惨禍の記憶は今後長期間にわたり私達を悩まそう。そして、いくつかの教訓を私達にもたらしたのも事実である。早期警告システムの設置、地域情報システムの設置、国際共同の強化、技術共有、津波教育と認識の徹底などである。

協力について言うならば、最近わが国の首都、クアラルンプールで開催された東南アジア諸国の科学技術分野の経験、専門知識および情報を交流するためのプログラムである第6回CO-EXIST-SEA会議つまりCO-EXIST-SEAワークショップについてお話ししよう。マレーシアの科学技術革新省（MOSTI）と、日本の科学技術振興機構（JST）との共催で開催されたこの会議の目的は、メンバー各国間の情報ネットワークと共同を確立し、強化することである。私は、マレーシアの同省の名誉副大臣であるダトー・コン・チャー・ハー氏のスピーチ内容にまったく賛同する。

彼は、この21世紀にあつて情報共有は特に絶対的に必要であり、情報・通信技術（ICT）発展の関連分野の経験や達成したことを互いに共有することこそ必要であり、それがこの会議の重要テーマであると話した。

会議はユニークであり、重要であった。これまで、6回の会議が持たれ、日本、マレーシア、インドネシア、ベトナム、フィリピンおよびタイの科学技術情報専門家やエキスパートが集い、科学技術情報を収集し流通する場合の諸活動の最新状況を話し合い、検討した。日本の参加は特に貴重であり、参加者一同、日本の代表が豊かな知識資源やシステムの開発と提供に当たるJSTの最近の諸活動と尽力の報告に感銘を受けた。例えば、書誌データベースであるJDream, JDream Petit, 特許データベースであるDocuPat, DocPatII, 電子ジャーナルの作成および出版のために日本の学協会に提供されているシステムのJStage, その他の数種のデータベースなどが報告された。その他の参加国の代表もそれぞれの国の科学技術の進展を促進させ、サポートする科学技術情報活動の成果であるとか革新的な尽力などの発表を行った。

参加国代表の会議は充実しており、代表者たちは

CO-EXIST-SEA活動とプログラムを向上させるための議論であるとか提案がなされた。そういった提案に、研修プログラムがある。この研修プログラムは参加者がその国に帰って科学技術情報活動の能力と範囲を設定するうえで大変に参考になる。これまでの研修はJAVAやXMLが主であった。第6回会議では、各国の代表者は、2005年3月に開催される新しい研修コースに賛同している。これは東南アジアと日本におけるコンテンツ開発と電子ジャーナルを概観するものである。さらに重要なことは、研修の参加者は日本の現在の情報サービスをつぶさに見られるようプログラムが組まれることである。適切な資源と技術能力を欠く発展途上国では、こういった種類の研修は必要である。つまり、科学技術情報収集と流通の戦略的なメカニズムに力点を置き、かつ適用できるようになるからである。

これまで実施されたCO-EXIST-SEA会議すべてにわたり見られる大きなプラス点は、それら会議の構成であるとか実施された方法にある。会議が暖かく、かつフレンドリーに設定されているが、これは単に会議場やセミナールームでのみ見られたばかりでなく、日本の代表が設定したカクテルパーティでも見られた。特にカクテルパーティでは、VIPを含むすべての参加者や賓客とカジュアルに交流でき、互いの利益に関するトピックについても議論できる。この相互交流こそ、参加国間での友情をはぐくみ、かつネットワークを築くうえでプラスのインパクトを与えるのである。私は幸運にもこれまで3回、同会議に参加できた。その間、日本の代表者の方々、その他の国の代表者の方々とよい友好関係を築いてきた。そのうちの一人が東洋大学の内藤衛亮教授で、彼はユーモアセンスにあふれる紳士で、CO-EXIST-SEAの創設時のメンバーである。私はこの会議が刺激的であり、貴重な経験を与えてくれるものと、考えている。実際、CO-EXIST-SEAは、電子メールに頼るあまり、実際に人々が会議で一堂に会するという機会がかなり減っているこの時代にあって、親善と友情をはぐくみ、かつ拡大するこの方法のユニークさは評価されるべきであると考ええる。

最後に、私はすべての参加国、そして特に日本の

JSTに対し1999年以来、CO-EXIST-SEAを寛大にも支援し、関与して下さったことにお礼を言いたい。この尽力は今後も必ずや、持続され、さらに育てられ、強化されねばならないと思う。このプログラムは数年にわたり、成功裡に、東南アジア地域でのパートナーシップの形成と友情のはぐくみの中で、次のような望ましい目的を果たしてきた。相互に利益をもたらす科学技術情報の向上と交流、富の創造、そして、困難な時代にあって互いを助け合うという目的である。今ここに再度津波の悲劇に思いをはせてみたい。津波対策に関しては相互協力なしにはなすべがない。おそらく、CO-EXIST-SEAは津波該当地域の参加国以外の国々もしくは、東南アジア地域以外の地域の国々にも参加を呼びかけるそういう時になっているのではないだろうか。

(翻訳 科学技術振興機構 加藤多恵子)

ノーマ、ムスタファ略歴

米国オハイオ州立大学で農学士を取得、ガボン国ポツワナ大学で人口および持続可能な開発分野で、修士号を取得。その後マレーシアのPertanian大学で農学の学位をとる。学位取得後、マレーシア政府農務省でいくつかの部署、例えば農業研究所、穀物生産課、農村地帯の婦人労働開発課、農業評議会などに勤務した。現在はマレーシア科学技術情報センター(MASTIC)の情報サービス部長。同センターの運営、監督、調整にあたる(運営には科学技術情報(MASTICLink データベース)が含まれる)。同時に出版、図書館のコンピュータ部門業務、同センターの開発面での仕事にも関与する。

連絡先:

Information Service Unit
Malaysian Science and Technology Information Centre (MASTIC),
Ministry of Science, Technology and Innovation,
Level 4, Block C5, Parcel C,
Federal Government Administrative Centre
62662 Putrajaya, Malaysia
E-mail: normah@mstic.gov.my